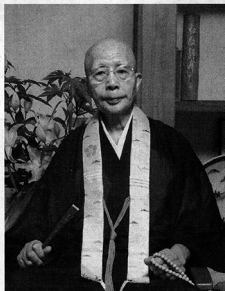


満州の学生時代、ソ連が侵攻

真言宗智山派眞照寺住職
日野わかさ幼稚園園長
清水 博雅 さん



「戦争は絶対にやってはいけない」と強く語る清水住職

ソ連の戦車を倒すための「特攻」要員として、満州の土に爆弾を抱えて埋まった。その時、母のことばかり考えていた。東京都日野市・真言宗智山派眞照寺の清水博雅住職(88)は、九死に一生を得た満州での経験を「あまりこれまで話したことはないけど」と言いつつも克明に語った。

清水さんは大正15年(1926)2月2日、眞照寺で生まれた。少年時代から利発で、東京府立第2中学(現・立川高校)に入学。昭和18年には満州国立新京畜産獣医学に合格。もちろん超難関で、全校あげての盛り上がりになった。折しも太平洋戦争が佳境にある時だった。

「なぜ満州の大学かというところ、当時この辺りは七生村という村だったので、その村長さんが当寺の檀家総代で、さらに満州開拓に非常に熱意を燃やしていた方だったので。第二の七生を満州に作ろう!」なんてね。それに、中学の先輩が満州国の開拓総局長をやっていた。そういったことが背景にあったわけです」

周囲はほめそやしたが、ただ母親だけは泣いた。「一人息子でしたから、住職として生きていってほしかったんでしょね。満州なんかに行くな、と泣くんですよ。でも、当時の雰囲気としては、行かざるを得ない雰囲気だった。昭和19年3月、級友や近所の人の「万歳!」の声の中、下関まで汽車で向かった。その時の心持は「窓から景色を眺めて、オイオイと泣いていた、ずっと。でも、大船を通り過ぎた時、観音さまが見えたんです。それでふっと心が落ち着きました」と話す。

下関、釜山から安東を経て新京に到着。大学生活は、満州国が理想として掲げていた「五族協和」の世界で、中国・蒙古・朝鮮・日本の青年が暮らす寮生活だった。

8月上旬、1週間の休暇をもらえた清水さんら学生は、8日の夜行列車で哈爾濱へ小旅行に出かける。ところが下車すると駅は厳戒態勢で、どうしたのかと軍人に尋ねると「貴様知らんのか、今朝ソ連が攻めてきたんだと言われた。不可侵条約を破ることはまったく予想しなかったことだという。ただ、学校では『ソ連が攻めてきたら君たちは特攻だ』とは言われていました。だからすぐに新京へ帰った」

もし終戦が一週間遅れていたら死んでいたと振り返る。15日にはみんな泣いた。それ以後の生活が問題だった。8月23日からソ連の占領が始まる。授業もなくなり、清水さんは団子の行商や薬売りで生活するようになる。ソ連兵から銃口を突きつけられて「お前は学生だと言っているが、実は軍人だろう」と恫喝され、シベリアに送られそうになったこともある。「その時に助けてくれたのが大抵で、一緒に勉強して、国民軍に入っていた中国人の先輩。こいつは学生で軍人じゃない」と証明してくれました」という。

地下室でラジオをこっそり聴き、日本の状況に想いを寄せる日々。いつ帰れるか分らないと思っていたが、昭和21年7月に突然、旧学生は日本に帰すという通告が出た。「日本には若者が必要だ」という政府の意向があったのかもしれないね。アメリカの輸送船で金州から博多へ帰還した。戦後、清水さんは大正大学に入学。高幡不動の秋山祐雅真首(後の智山派派長)の弟子になった。立川第一中学の教員も務め教員に慕われたが、地域の要請で昭和43年に日野わかさ幼稚園を開園。以来50年近く住職と園長の二足の草鞋を履いている。全日本私立幼稚園連合会副会長などの要職も多数歴任した。

「戦争は絶対にやってはいけない」と強く語る清水住職

「万歳!」の声の中、下関まで汽車で向かった。その時の心持は「窓から景色を眺めて、オイオイと泣いていた、ずっと。でも、大船を通り過ぎた時、観音さまが見えたんです。それでふっと心が落ち着きました」と話す。

8月上旬、1週間の休暇をもらえた清水さんら学生は、8日の夜行列車で哈爾濱へ小旅行に出かける。ところが下車すると駅は厳戒態勢で、どうしたのかと軍人に尋ねると「貴様知らんのか、今朝ソ連が攻めてきたんだと言われた。不可侵条約を破ることはまったく予想しなかったことだという。ただ、学校では『ソ連が攻めてきたら君たちは特攻だ』とは言われていました。だからすぐに新京へ帰った」

もし終戦が一週間遅れていたら死んでいたと振り返る。15日にはみんな泣いた。それ以後の生活が問題だった。8月23日からソ連の占領が始まる。授業もなくなり、清水さんは団子の行商や薬売りで生活するようになる。ソ連兵から銃口を突きつけられて「お前は学生だと言っているが、実は軍人だろう」と恫喝され、シベリアに送られそうになったこともある。「その時に助けてくれたのが大抵で、一緒に勉強して、国民軍に入っていた中国人の先輩。こいつは学生で軍人じゃない」と証明してくれました」という。

地下室でラジオをこっそり聴き、日本の状況に想いを寄せる日々。いつ帰れるか分らないと思っていたが、昭和21年7月に突然、旧学生は日本に帰すという通告が出た。「日本には若者が必要だ」という政府の意向があったのかもしれないね。アメリカの輸送船で金州から博多へ帰還した。戦後、清水さんは大正大学に入学。高幡不動の秋山祐雅真首(後の智山派派長)の弟子になった。立川第一中学の教員も務め教員に慕われたが、地域の要請で昭和43年に日野わかさ幼稚園を開園。以来50年近く住職と園長の二足の草鞋を履いている。全日本私立幼稚園連合会副会長などの要職も多数歴任した。

「争いはなくならないかもしれないけど、子どもたちには戦争は絶対にやってはいけないということ、人間の命を奪ってはならないということを知ってほしいですね。不殺生ですよ」と、死線を潜り抜けた教育者は穏やかかつ力強く語った。

人間地雷「特攻」土中へ：母に会いたい

人間地雷「それは地面に穴を掘り、その中で爆弾を抱え、ソ連の戦車が進んでくると、地雷が作動して爆発させるといって、特攻だ」と言っていた。学生たちは「人間地雷」を命じられた。人間地雷「それは地面に穴を掘り、その中で爆弾を抱え、ソ連の戦車が進んでくると、地雷が作動して爆発させるといって、特攻だ」と言っていた。学生たちは「人間地雷」を命じられた。人間地雷「それは地面に穴を掘り、その中で爆弾を抱え、ソ連の戦車が進んでくると、地雷が作動して爆発させるといって、特攻だ」と言っていた。学生たちは「人間地雷」を命じられた。

満州国 日本のお関東軍による昭和6年9月18日の柳条湖事件を経て、翌昭和7年に中華民国から分離させて独立。敗戦と共に消滅した。元首には清朝最後の皇帝、愛新覚羅溥儀がついた。日本からは満蒙開拓移民団が送られたが、ソ連参戦と敗戦後の引き揚げでは多くの犠牲者を出した。